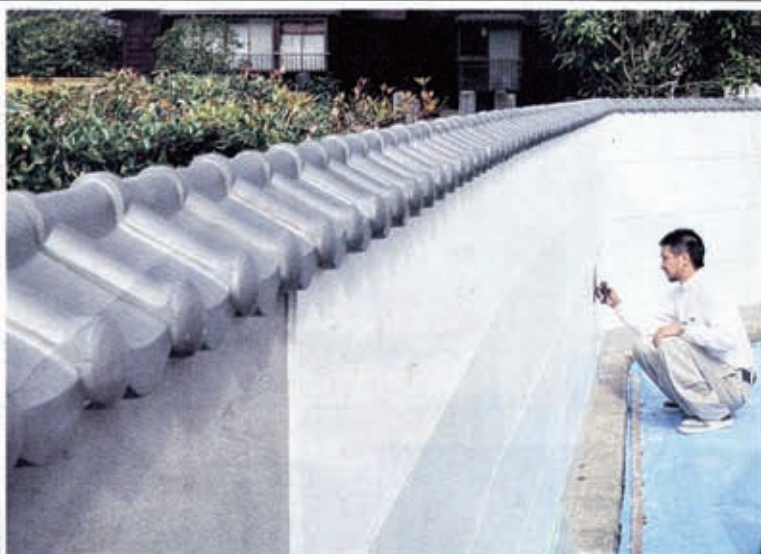


ザツ、ザツと鑿て壁をならす音が住宅地に響いた。加茂市上町の広円寺で10月、寺を取り囲む塀の化粧直しが大詰めを迎えていた。汚れの浮き出た灰色のブロック塀が白く塗り直され、陽光に輝いた。作業に当たったのは、いりやまと

にいがたの老舗 100年の系譜

(新潟市中央区) など新潟市内で左官業を営む職人たちが。
高さ約1・8m、総延長約350mの塀に割れ止め目地を入れて塗り、セメント系の材料を上塗りして漆喰風に仕上げた。壁面と目地の段差や瓦との接合面

塗りを極める いりやまと (新潟市中央区) ④



寺院で塀塗りの仕上げに当たる職人。規模の大きい仕事が増える中、若手にとって腕を磨く貴重な場となった10月、加茂市上町の広円寺

を平らにするなど、難易度が、何事も経験だと任せの高い作業は4カ月以上に及んだ。の堀美幸さん(23)。佐藤正

「目地棒の据え付けは人工事部長(52)は「これだ」と初めての作業もあつた。けの規模の仕事はめつた

左官技術継承に熱意

住宅進出 自然素材訴え

にない。若手にはいい勉強が、より安価な工場製のタ強になったはず」とうなずイルが主流になった」と振り返る。

左官業から始まった同社 訓練所は結局、90年ころは、職人の育成に力を入れ 閉鎖した。その一方で、技に事業所内職業訓練所を始めた。一般住宅の建築や併設。10代の若者が昼間 リフォームだ。

だが、伝統的な技術を用 像を模索し、自社の増改築を混せた床材を、現地で研 を重ねた。道路のり面の緑

例えは、大理石とセメント メージを形にする。実験”は「かつてはホテルの床や 前面には打ち出さなかった 階段などでよく使われた が、年に数軒ずつ設計段階



から携わった。

2007年には新潟市内の個人宅の内壁を全面的に漆喰にして喜ばれ、自信を深めた。戸川社長は「土が原料の塗り壁は湿度調整や保温、防音効果が高い。高温多湿の日本で自然素材に勝るものはない」と強調。化学物質や冷暖房エネルギーの低減が追求される昨今の住宅事情を追い風に、普及を図る。

ほかの工法に比べて予算や手間がかかるため、施主や設計者に繰り返し質の高さを訴えていくつもりだ。戸川社長は「技術を残していくためにも、チャンスには何でも飛びつくつもり」と力を込める。

建築資材の販売や土木工事、住宅建築と仕事の幅を広げてきた同社。時代の流れに乗っても、原点の左官業から離れることはない。

(おわり)
写真＝創業100年記念に、かつての職人が漆喰で制作した看板。立体感のある商標と社名は左官技術のたまものだ(新潟市中央区のいりやまと本社)